
270分?

駟牙 連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

270分？

【Nコード】

N4353Z

【作者名】

駆牙 連

【あらすじ】

オペ室看護師の進藤雅樹シンドウマサキは同僚看護師の成海大和ナルウミヤマトへの七年間の片想いがようやく実った。しかし、思う様に関係は変わらず、不安は募っていく。——『270分』の続編です。先にそちらを読まれる事をオススメします。

身体は常に正直だけど、心は簡単に嘘をつく。

俺、進藤雅樹は叶わないと諦めていた七年越しの片思いが実り、幸せの絶頂にいる。・・・筈なんだが。

「じゃあ、俺そろそろ帰るわ」

「何、泊まってかないの？」

「あー・・・そうしたいんだけど、明日のオペの勉強しとかなきゃマズイんだって。悪イ」

今日も、ナルは帰って行った。元々ただの男同士の友達だった俺らは、お互いの気持ちを確認した後も仕事以外で会うペースが変わり事はなく、関係だって何ら変わってはいない。

まあ、七年間続けていた関係なんて急に変化するもんでもなく、唯一違うのはたまに訪れるぎこちない、間。それが照れからなのか、そうある事を望んでいるのか、よく分からない。むしろ、お互い気持ちを確認しただけで、付き合おうとは一言も言っていない。ナルは俺らの関係をどう捉えているのか。悩みはループしていく。

ただ俺は今、非常に欲求不満だ。男って、そういうモンだろ。好きなヤツが傍にいるんだから当然だと思う。

「あー・・・さわりてえ」

ナルのいない部屋で一人こぼす。今は原付を持っているナルが自転車しかない俺んちに来ることが多く、泊まるも帰るもナル次第なのだ。

「おはようございまーす」

「おはよう」

疲労も重なってくる週の半ば、水曜日。いつも通りの朝、いつものように手術室の準備をする。

今日一緒の部屋を担当するのは七年目の女性の看護師、長谷さんだ。

「なんか疲れてるねー。隈できてんじゃん」

「あー・・・なんか寝不足なんすよ」

「あ、杏奈ちゃんにフラれたことを引きずってるのー？」

俺の悩みなど露知らず、根っから明るいこの先輩は見当違いの空気を読めない発言をしてくる。

「違いますよ・・・」

「あつ、そういえばナルくんが眼科のユカリ先生に迫られてるって知ってる？」

「へっ?!」

朝から何て事を言い出すんだ、この人は。

「前からそういう話はあったけど、最近頻繁に家に誘ったりしてるんだって。ナルくん、モテるよねー。狙ってる女医が結構いるらしいし」

眼科の山下ユカリ。確か三十路近かった筈だが、結構美人で男関係激しいという噂だ。

確かにナルはモテる。それは今に始まった事ではない。しかし、やはり気にはなる。人の気持ちなど移ろいやすいものだ。もしも、俺ん家から帰った後、他の女の所に行ったら――。

「進藤くん？ダイジョーブ、君もきつといい人現れるって!」

「はあ・・・どーも」

もちろんナルとの関係は周りに知られてはいけない。これでいい。だけど――。

ナルを独占したい。俺を一番に思っただけ。

自分が思う強さと同じくらい、相手にも思っただけと思うのは、やっぱりワガママなんだろうか。

「なー。今日眼科の飲み会に誘われたんだけど、マサも行かねえ？」
短い昼休み、幸運にもナルと時間が重なった事に喜んでいた俺は、
一気にどん底に突き落とされた。

「え、今日は・・・」

今日はナルと新しく出来たお好み焼き屋に行こうと約束していた
筈だ。

「なっ、俺一人じゃ行きにくいし、他の看護師誘っていいって言わ
れたし」

・・・今日は、ナルに気持ちを伝えた日からちょうど一ヶ月だ。
女の子じゃないんだし、そんな事をいちいち気にするのは自分らし
くないと思うけど。だけど、そんな日をナルと過ごせる事を嬉しく
思っていたのも事実だった。

「マサ？あんまり気分乗らない？」

しかも眼科。どう考えたって山下ユカリの下心しかねーだろ。悪
気なく話すナルにイライラする。

「俺はいいよ。せっかく誘われたんだしナルが行けばいいんじゃない
？」

「・・・マサが行かないんだったら俺も行かない」

ナルが怒られた仔犬の様な顔をする。そんなに行きたかったのか？

「行けて。俺の為に行くの諦めて貰っても別に嬉しくねーし」

こんなにキツイ言い方をしたい訳じゃないのに。

「ゴメン。でも、今日はマサと晩メシって――」

「いいよ。メシくらいいつでも食えるし。また今度な。・・・じゃ
あ午後の準備あるから」

隠した本音が溢れ出しそうで、俺は不自然に席を立った。何か言
いたげなナルを一人残して。

「進藤くん、なんか疲れててる？」

最近頻繁に言われるこのセリフを、午後のオペでも言われてしまった。心配してくれたのは、皮膚科の美しいお姉様方。

「そーなんですよ。この子、最近杏奈ちゃんにフラれたばかりで」
余計な事を言うのはやっぱり長谷さんだ。何でそーゆーハナシを・・。

「そうなんだー可哀相！進藤くん、いい子なのにね」

「ホントだよねー。そういえば痩せたんじゃない？」

マジで？

「えーツライ！今日の夜、私達イタリアン行くんだけど、進藤くんも来る？」

へ？！

「よかったら長谷さんも！」

「いいんですかー！行きましょ。進藤はいつでもヒマですから！」
オイオイオイ！何を勝手に・・・

「進藤？行くわよね？」

長谷さんからプレッシャーをかけられる。断れねーだろ、この状況。

まあ、いいか。ちょうどナルとの約束が無くなったとこだし。一人で家で悶々とするよりは気が紛れるだろ。

「いーすよ」

半ばヤケに返事をしてしまった。でもこの時、俺は自分の行動の浅はかさにまだ気付いていなかった。

「スゲー高そうな店だったよな・・・」

お姉様方は、俺と長谷さんの分も支払ってくれた。夜景の綺麗な高級イタリアン。

更には、家の前まで高級車で送ってくれた。医者羽振りの良さ

にはいつも驚かされる。

「ちよっと量は少ないけどなー・・・」

自宅マンションのエレベーターに乗りながら、今日の食事を思い出す。ただ、やっぱりナルとお好み焼きを食べたかった。今頃ナルは眼科のドクターに迫られたりしてんのかな・・・。

切ない気持ちのまま、おもむろに携帯を開くとそこにはナルからの着信履歴が三件。不運にもサイレントモードかよ。

「ヤベ、全然気付かなかった・・・」

かけ直したいがここはエレベーター。降りてすぐに電話しよう。それから謝りたい。話したい。出来るなら、今日この後にでも会えたら・・・。

「・・・ナル」

一瞬目を疑った。開いたエレベーターの前に立つのは、紛れもない、成海大和、その人だった。

ナルも驚いた顔をしている。俺ん家に来てくれてたのか。そんで今から帰ろうしてたのか？

「どうして・・・眼科の飲み会は・・・」

ナルは俯いた。右手には白いナイロン袋を提げている。

「断った」

「え？」

「お前とお好み焼きが食べたかったんだけど・・・。これ、要らなかったら捨てていいから」

言ってナルは手に持つ袋を渡してきた。中にはまだ暖かいお好み焼きが入っている。行きたかったあの店の、テイクアウトだった。

「・・・これって。ナル、俺――」

「ゴメン、今日は帰る」

ナルは短く会話を切ると、俺が乗ってきたエレベーターに入り、扉を閉めてしまった。

その表情は怒っていると言うよりも、泣きそうにも見えた。

想いが通じ合って一ヶ月間の時間があつた。しかし俺はといえば、キスどころか手を握ったり抱きしめたりさえ出来ずにいる。

理由は簡単だ。要は臆病になつてゐるだけ。叶う筈がないと決め込んでいたから、いざ手にしてみると失うのが不安で怖くて動けなくなつてしまつた。ナルの一挙一動が心配で深読みして勘繰つてしまふ。やっぱり女の子がいいんじゃないか、いざ触れて気持ち悪がられたらどうしようか、やっぱり友達でいたいと言われたら、考え始めたら止められない。ただ俺を一番不安にさせるのは、ナルが泊まらずに帰つてしまふという事実。そんなちっさな事。

『——ただいま電波の届かない所におられるか、電源が入つておりません』

ナルが電話に出てくれない。動揺する俺の目に飛び込んでくるのはナルから貰つたナイロン袋。中にはお好み焼きが2つ、悲しそうに肩を並べている。

「——お好み焼き、か」

こんなことなら、家でおとなしくしていればよかった。そうしていたら今日はきつと楽しい一日になつていたのに。

「明日、ちゃんと話そう・・・」

この時はまだ、ちゃんと話せばすんなりと解決すると思つていた。

翌日、俺の勤務帯は遅出だつた。そのためナルに会えたのは昼過ぎになつた。それもいけなかつたのか。

「ナル。ナルってば！」

ロッカールームから出ようとするナルに声をかける。幸い他には

人はいない。

顔を背け話そうとしない。

「おい、待ってっ！」

ナルの腕を掴む。するとナルは俺の手を振り払った。

「――誰かに見られるだろ」

その一言にカッとなってしまった。

「んだよ、ソレ！・・・そんなに、直接話聞いて貰えない、電話でも話す事を拒まれるなら、俺はもう知らねえ」

「え？電話・・・」

何か言いたげなナルを残し、踵を返した。

ナルの事を誰よりも大切にしたいのに、少しも上手くいかない。いつもに増して重い気持ちで午後の仕事を迎えた。

「は・・・疲れた。ハラ減った・・・」

緊急で入った手術が予想外に長引き、家に帰り着いた時には、もう日を跨ごうとしていた。携帯をチェックするが、ナルからの着信はない。

ナルとゆっくり話がしたいけど、こんな時間では迷惑だろうか。ただの友人であった頃より、余計な事を考え過ぎてしまう。

ナルは、友人に戻りたいとか、思っていないんだろうか。

トボトボと自転車置場からマンションの玄関へ向かう俺の目に映るのは、植え込みの縁に座る人影。まさか・・・。

「・・・ナル？」

呼ばれて顔を上げると、俺を見てあからさまにホッとした顔をしてみせた。

「――入る？」

その様子が愛おしくて、俺は少し怒って突き放した事も忘れて、

家へと招いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4353z/>

270分?

2011年12月19日12時51分発行